

の状況からは南北に長い寺域を想定することができる。この寺域の中で中心となるのは、土壇をもつ礎石建物跡である。礎石建物跡は南面する東西建物であり2間×3間の規模をもつ。周辺部には目立った遺構は認められないこと、土壇中からは多口瓶が3点出土したこと、2間×3間の建物規模は仏堂としての最低規模に該当することから、この建物が千間堂の仏堂であったものと想定される。寺伝をそのまま信用するならば、普賢菩薩がこの仏堂の中に安置されていたことになる。前述の平成13年度の調査地では、調査前の想定として僧房などの大規模な建物跡を想定していたが、調査の結果、建物遺構を復元できたのは2棟であり、このうち全容がわかるのは1間×2間の規模をもつ1棟のみである。このような状況を総合すると北嶺千間堂の伽藍配置は土壇をもつ礎石建物跡（仏堂）を中心に小規模な掘立柱の建物遺構が点在する伽藍配置が想定される。

3. 北嶺で出土した平瓦の用途について

確認された土壇をもつ礎石建物跡は2間×3間の規模をもつがこの規模は、通常古代寺院では鐘楼や経蔵規模の建物あるいは付属雜舎程度のものである。これまでの千間堂跡の調査から、これ以上の規模の建物跡は確認されておらず、また標高284mにある山岳寺院であることを併せ考えると、この建物は本尊を祀るべく建てた小仏堂であると判断される。また、西側にある火葬墓と考えられる集石遺構中からは平瓦が出土している。平瓦に混じって多くの土器が出土しているが、これについては墓を造る際に周囲の土を掘き集めた中に含まれていたものであると考えられる。

出土した平瓦には完形品のものではなく、大きな破片でも幅は2分の1程度の法量であることから、これらの平瓦は熨斗棟に使用されていたものと想定される。平瓦の出土が少量であったことは、北嶺から南嶺への移動時に使えない平瓦は北嶺に残し、使える平瓦のみ南嶺にて再利用した可能性が考えられる。この場合、北嶺で確認した平瓦と法量・調整・胎土等が同じ物を南嶺において確認する必要があるが、現在のところ、同じ物は確認できていない。

4. 基壇中から出土した須恵器多口瓶について

類例について

北嶺にある千間堂礎石建物跡の土壇から須恵器多口瓶が3点出土したことにより寺跡であることが判明したことは第3章第5節に詳述した。全体像が復元できたのは3点であるが、土壇中から出土した肩部から胴部への変化点に突帯を1条巡らせる須恵器片101は多口瓶104の肩部から胴部の形態が似るが、胴部径が違うことから同一個体ではないと考えられる。径の大きさからすれば、綾歌郡飯山町で確認されている多口瓶の規模に似る。この他、北嶺の確認調査では、出土した須恵器壺の口縁部形態が多口瓶の注口部の形態に似るもの119・173～176・237も認められることから、全体像が復元できた3点以外にも複数個体存在していたものと想定される。千間堂跡以外の須恵器多口瓶の類例は香川県内では前述の綾歌郡飯山町法勧寺⁽³⁾から1点出土している他、周辺部では姫路市播磨国分寺⁽⁴⁾から4点、倉吉市大御堂廃寺⁽⁵⁾から1点出土している。周辺部で出土している多口瓶は、これ以外にも存在していると考えられるが、肩部から胴部への変換点に存在する注口部が出土しないことには多口瓶とは認識されないことから、寺院跡から出土した須恵器長頸壺と報告されているものの中に、少数ながら含まれている可能性が考えられる。以下に周辺部で確認された多口瓶の類例をあげ類似点・相違点についてみてみたい。

① 法勧寺（香川県綾歌郡飯山町）

調査は大東川の支流大窪谷の災害復旧工事に伴うもので、寺域の北限を画すると推定されている大窪谷川の南側護岸部分の確認調査で、礎混じりの流路（溝）堆積層より白鳳期～室町時代の瓦に混じって出土している。出土している多口瓶は注口部から胴部上半の破片である。千間堂跡出土の多口瓶の内、形態が似るのは胴部最大径に突帯を1条もつ多口瓶第112図7に似ている。法勧寺出土例も胎土に砂粒を多く含み、内面には接合痕が認められる。突帯の接合方法も上部は撫でられているが、下部は接合痕が認められるなど、第112図7と同じ工人・窯跡産のものである可能性が極めて高い。ただし、法勧寺例は反転復元された遺物実測図を見る限り、最大胴径14cm弱と第112図7に比べて一回り近く小さい。法量からすれば、多口瓶第112図5と同じぐらいの大きさになるものと想定される。法勧寺例は注口部

を欠損しているため、どのような注口部がつくのか不明であるが、多口瓶の形態・胎土などからすれば屋島千間堂跡例と同様に斜め上方に開く注口部をもつものと想定される。

② 播磨国分寺（兵庫県姫路市）

多口瓶は12次金堂区の金堂基壇南、西端から東端までの金堂南再堆積土中から出土している。多口瓶は4個体出土しており、出土した土器の大半が示す時期は10世紀後半～11世紀半ばに位置付けられると考えている。そのうちの2点については、遺物を実見された橋崎彰一氏が「寒風」産との評価をされたようである⁽⁶⁾。図示された播磨国分寺出土の多口瓶は肩部と胴部の境界に突帯を一条巡らせるが、注口の接合部によって突帯の一部が接合部に埋没する形状をとる。

兵庫県内では、これらの多口瓶以外に注口部が上を向くものが1点認められるようで、これについてには灰釉陶器の影響下で作られたものと考えられる⁽⁷⁾。

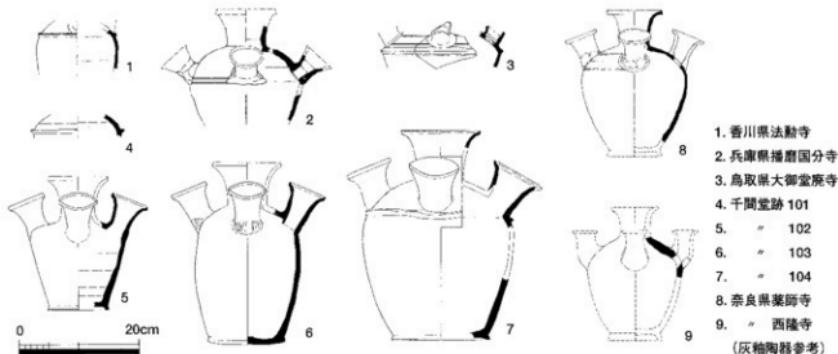
③ 大御堂庵寺（鳥取県倉吉市）

遺跡公園整備を目的に平成8年から平成12年まで試掘・確認調査が実施され、大規模な寺域や本格的な伽藍配置、長大な浄水施設などが確認されている。多口瓶は講堂SB05を中心とする範囲から同一個体と思われる破片が広く散在する状況で出土している。

大御堂庵寺出土の多口瓶は肩部から胴部の変化点に突帯を一条巡らせるが、変化点よりやや上部に注口がつけられること、注口部の頸径より肩部に穿孔された穴の径の方が一回り小さく開けられるなど、注口と肩部の接合方法も異なる。

④ その他

平成11年5月に多口瓶の類例調査のため、奈良文化財研究所において同研究所が保管している突帯をもつ多口瓶等の類例を実見する機会を得た⁽⁸⁾。実見できたものの中には千間堂跡出土多口瓶1に類似する例は認められなかった。



第112図 周辺地域で確認された須恵器多口瓶の類例

千間堂跡出土多口瓶の产地について

讃岐を代表する窯業遺跡群として十瓶山窯跡群があり、ここで焼成された可能性がある。これまでの十瓶山窯跡群での発掘調査においては、多口瓶は現在のところ確認されていないようである⁽⁹⁾が、特殊な器種であることから生産数が限られ、窯場に残らなかった可能性も想定される。

5. 多口瓶の出土状況—作壇作業について—

礎石建物跡土壇中から出土した多口瓶は土壇の東側の集石付近を中心に出土しているが、すべてが東側集石から出土しているわけではない。多口瓶の注口部片は土壇の西側からも確認されており、土器の出土深度は土壇表面から10cm程度の深さである。集石上で確認された多口瓶も形は大きかったものの破片で出土している。多口瓶の類例としてあげた倉吉市大御堂庵寺では講堂と考えられる建物の基壇中

から出土しているよう、報告書によれば、出土した多口瓶と同一個体と考えられる破片が周辺に広がっていたと報告している。姫路市播磨国分寺から出土した多口瓶も金堂の再堆積土から破片で出土している。北嶺千間堂をはじめ他の多口瓶も基壇を造る際の地鎮として、仏具である多口瓶を破碎し、基壇造成土に埋め込んだ可能性が考えられる。時代は古くなり、出土した遺物も異なるが、中央では寺院の下部造構である基壇を作る際に明日香村川原寺の塔の場合は、無文銀銭と金銅円板が版築土中から発見されている他、西大寺東塔では、基壇完成までに銭播地鎮が少なくとも三回にわたって行われたことが確認されている。同寺西塔でも金銭開基勝宝が地鎮に使われていた可能性を想定されている⁽¹⁰⁾。時代も異なり、中央と地方の差はあるが、形を変え品を変えながらも、作壇の際には、寺の安寧を願うため仏具である多口瓶を破碎し、土壤に破片を埋納する地鎮を行いながら、作壇作業が行われたものと想定される。

6.まとめ 北嶺（千間堂）から南嶺（屋島寺）への変遷について—

最後に確認調査で判明した成果をもとにこれまでの記録との整合性を検討し、千間堂から屋島寺への変遷を考えてみたい。なお、第3章第6節において屋島寺の変遷については既に述べており、調査において大きな変化がなかった近世以降の重複する部分については触れていない。

屋島寺の出発点である北嶺千間堂の創建時期であるが、鑑真が開基したとされる754年前後まで遡る遺物は北嶺では認められない。北嶺では9世紀以降から遺物が認められるが、出土量は10～11世紀にかけての遺物が多い。寺の中心施設となる仏堂からは3個体の須恵器多口瓶が出土したが、多口瓶には底部などの形態から時期差が認められ、平底をもつ多口瓶が10世紀前半の時期の年代が与えられ最も新しい。他の2個体は寺に伝世していたものを10世紀の前半に土壇をもつ礎石建物を構築するため、破碎されたものと想定される。北嶺にて仏堂と考えられる礎石建物が建てられた時期よりもやや先行する時期に現在の屋島寺本尊である木造千手觀音坐像が作られている。寺の記録には空海自らが彌陀千光院に安置したとあるが、空海の存命期間（774～835）と製作年代が合わない。屋島寺は鑑真が北嶺に開基した時には、本尊は普賢菩薩であり、時代は下るが1391年（明徳21年）の西大寺末寺帳に「屋嶋普賢寺」という寺名がみえ、この寺名は普賢菩薩に由来するものと想定されている。どの段階で本尊が変更になったものか現在のところ不明である。

さて、北嶺から南嶺への移動であるが、北嶺で出土する遺物が11世紀代を境に減少する一方、南嶺ではこの時期から遺物が増加することから、11世紀末から遅くとも12世紀初頭には寺が南嶺に移ったものと想定される。この移動の大きな原因是、この頃から四国霊場八十八箇所巡り⁽¹¹⁾が始まったことにより、参拝に不便な北嶺（修驗の場）から、平野に近い南嶺（世俗化）に移した結果であると考えられる。その後、寺域は拡張されていったよう、梵鐘に記載された銘文から1223年（貞応二年）讃岐国住人蓮阿弥陀仏の勧進によって梵鐘が鋳造されている。かつて血の池とは一連の池であったと想定される貯水池推定地（平成13年度第3調査地点）の調査では、調査範囲は狭かったものの、調査の結果、堆積土のうちの第4～6層から炭・焼土とともに多くの瓦が出土した。瓦とともに出土した土器はやや時期差が認められ、土器よりも瓦の方が占相を呈しているように思われる。第6層から出土した軒丸瓦は瓦当文様に退化傾向が強い複弁八葉の軒丸瓦であるが、この文様に続く巴文軒丸瓦は香川では12世紀に入らないと出現しないようであることから、第6層出土の複弁蓮華文軒丸瓦の年代をひとまず11世紀代に求めることにしたい。これに対して同時に出土した土器のうち、時期が近い土器は2点ある。土師器杯は13世紀第2四半期～第3四半期の時期が与えられ、土師器皿は11世紀第2四半期～第3四半期頃の時期が与えられるが、6層の時期は新しい方の土師器杯の年代が考えられる。この第6層からは焼土・炭や火を受けた木材などが多く出土していることから、13世紀の中頃以降に寺の一部が焼失したものと考えられ。今回第6層から出土した遺物は、この火災によって出た廃品・廃材を血の池の南に投棄されたものであると考えられる。その後、本堂は鎌倉時代末頃に建てられたようで数度の改修を経て現在に至る⁽¹²⁾。明徳21年（1391年）の西大寺末寺帳には「屋嶋普賢寺」という寺名がみえ、永享8年（1436年）の「西大寺坊寄宿諸末寺帳」には「讃岐國屋嶋寺」とあり⁽¹³⁾、現在の寺名になっている。この末寺帳から一時期真言律宗の寺になっていたことがうかがえる。前者では本尊に由来する普賢寺がみえるが、50年近く後には屋嶋寺に変わっていることから、この間に何らかの理由で本尊であ

る普賢菩薩が行方不明になり、現在に伝わらなかったと考えられる。

西大寺の末寺となっている15世紀初めには、土塹を北側につくり寺域を拡張していることが、平成8年度の確認調査で判明している。その後の状況はよく分からぬが、大永4年（1524年）には梵鐘が金倉寺に一時的にではあるが移されており、この頃は屋島寺が力を失っていたものと考えられる。江戸時代以降は龍巖の勧進に始まり、歴代の藩主の加護を受け、急速に復興し現在に至っている。

屋島寺の末寺は、四天門前にあった南泉寺（讃岐國名勝図会の絵図にも記載がある）の他、一乗坊・善賢院・宝積坊・盡嚴坊・比之坊・元久坊・東景坊・長嶺坊の8末寺⁽¹⁰⁾が山上や近くにあったらしいが、江戸時代の中期までに廃されたと伝えられている。現在、これらの末寺の所在は不明であるが、平成9年度第2調査地点では中世段階の遺構・遺物が出土していることから、これら現在不明となっている末寺の内の一つである可能性も考えられる。

以上、調査で得られた資料をもとに千間堂へ屋島寺の変遷を想定したが、資料が増加したとは言え不明な部分があり十分な変遷が辿れたとは言えない。特に屋島寺宝物館建設予定地内の調査で出土した遺物は、今回の報告では一部分を提示したとどまり、末報告の遺物については十分な観察が行えなかつた。この件に関しては機会を見て遺構・遺物の検討を行いたい。

注

- (1)「龍巖勧進帳」香川叢書第一巻 1972年
- (2)「金毘羅參詣名所図会」「讃岐國名所図会」「日本名所風俗図会」角川書店 1981年
- (3)森下英治「法勅寺」香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度 香川県教育委員会 1996年
- (4)姫路市教育委員会山本和子氏には遠路高松まで実物をお持ち頂き、多口瓶を実見する機会を得た。播磨国分寺出土の多口瓶は下記の文献に1点のみ公表されている。
- 第3回 播磨考古学研究集会実行委員会編『古代寺院からみた播磨』第3回 播磨考古学研究集会 資料集 2002
- (5)『史跡 大御堂窯跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 2001年
- (6)姫路市教育委員会山本和子氏の御教示による。
- (7)灰釉陶器の多口瓶は注口部が上方を向き口縁部は水平になる。これは金属器の淨瓶、水瓶を模倣したことによるもので、これは以前から指摘されている。このことから千間堂跡例のような注口部が斜め上方に開くものは地方窯で作られたものと想定される。
- 橋崎彰一『日本陶磁大系5 三彩 緑釉 灰釉』平凡社 1990年
- (8)奈良文化財研究所翼淳一郎・金田明大尚氏の協力により、同研究所が調査を行った須恵器多口瓶の類例を実見する機会を得ることができた。翼氏の御教示では9世紀後半から10世紀頃の古代でも末になると中央からの注文とは別に力の強くなった寺が、窯場に特注で製品を依頼している可能性があるという。
- (9)香川県教育委員会佐藤龍馬氏の御教示による。
- 岩橋 孝「すべっと 4号窯跡」「かめ焼谷1号窯跡」香川県教育委員会 1991年 写真中に注口をもつ壺が報告されている。
- (10)翼淳一郎「まじないの世界II」「日本の美術」361至文堂 1996年
- (11)「今昔物語」巻第三十一第一「四話」に「今は昔、仏の道を行ひける僧三人ともなひて、四国の辺地といふは伊予、讃岐、阿波、上佐の海辺の廻りなり。その僧どもそこを廻りけるに…」とあるのが四国靈場の初現と言われている。
- 上原真人「平安京周辺の平安時代後期瓦の様相 一生产地認定法と在地消費をめぐってー」『中世寺院の幕明けー11・12世紀の寺院の考古学的研究ー』根河泉文庫 根河泉古代寺院研究会 2001年
- (12)『重要文化財屋島寺木堂修理工事報告書』香川県 1959年
- (13)『香川県史8 古代・中世史料』香川県 1986年
- (14)松浦正一「屋島寺」『観光学術読本 屋島』高松市商工観光課 1962年

図面引用文献

- 法 犬 寺 注(3)文献
 播磨国分寺 注(4)文献
 大御堂窯寺 注(5)文献
 菓 師 寺 「菓師寺発掘調査報告」奈良国立文化財研究所 1987年
 西 隆 寺 「西隆寺発掘調査報告書」奈良県教育委員会 1993年

図 版



1 鯨の墓完掘状況（東から）



2 鯨の墓頂上部完掘状況（南から）



3 後内部南斜面発掘調査前状況（西から）



4 前方部発掘調査前の状況（西から）



5 第1トレンチ（東から）



6 第1トレンチ（西から）



7 第2トレンチ填頂部（南西から）



1 第2トレンチ（北から）



2 第2トレンチ（南から）



3 第3トレンチ（南から）



4 第3トレンチ 2・3段目葺石（南から）



1 第3トレンチ2段目葺石（南西から）



2 第7トレンチ全景（北から）



3 第7トレンチ全景（南から）



4 第7トレンチ全景（南西から）



5 第7トレンチ全景（南東から）



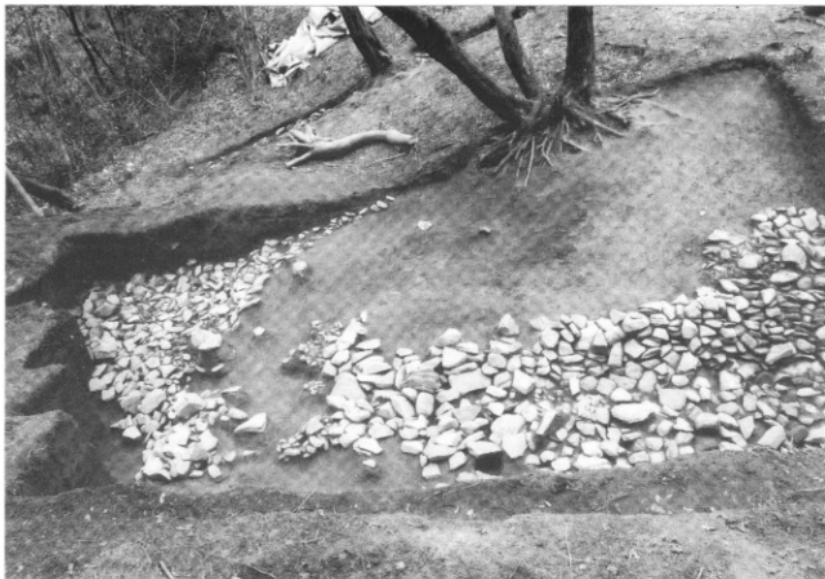
6 第3トレンチ3段目葺石（南西から）



7 第1・2・8トレンチ（東から）



8 第1・2・7トレンチ（東から）



1 第7トレンチ（西から）



2 第8トレンチ（西から）



1 第8トレンチ（南から）



2 第8トレンチ3段目葺石（南東から）



3 第8トレンチ2段目葺石（南東から）



4 第8トレンチ端部（南から）



5 第8トレンチ（東から）



6 第8トレンチ（北東から）



7 第8トレンチ（北東から）



1 第4トレンチ（北から）



2 第4トレンチ（北から）



3 第4トレンチ 2段目葺石（北西から）



4 第4トレンチ 3段目葺石（北西から）



5 第4トレンチ墓壙（北東から）



6 第4トレンチ石梆（北から）



7 第4トレンチ墓壙土層（東から）



1 第6トレンチ（南から）



2 第6トレンチ1段目葺石（南東から）



3 第6トレンチ（南東から）



4 第6トレンチ3段目葺石（南西から）



5 第6トレンチ墓壙（北東から）



6 第6トレンチ墓壙堀削状況（南から）



7 第6トレンチ墓壙土層（東から）



1 第5トレンチ填丘斜面部（東から）



2 第5トレンチ填丘斜面部（西から）



3 第5トレンチ 1段目葺石（南東から）



4 第5トレンチ 2段目葺石（南東から）



5 第5トレンチ 3段目葺石（南東から）



6 第5トレンチ 3段目葺石（南から）



1 第5トレンチ石櫓及び盗掘坑検出状況(西から)



2 第5トレンチ石櫓及び盗掘坑検出状況(東から)



3 第5トレンチ墓壙(東から)



4 第5トレンチ墓壙(南東から)



5 第5トレンチ石櫓西側(南から)



1 第5トレンチ石櫛検出状況（西から）



2 第5トレンチ盗掘土除去中①（東から）



3 第5トレンチ盗掘土除去中②（南から）



4 第5トレンチ盗掘土除去中③（南から）



5 第5トレンチ盗掘土除去後①（南西から）



6 第5トレンチ盗掘土除去後②（南から）



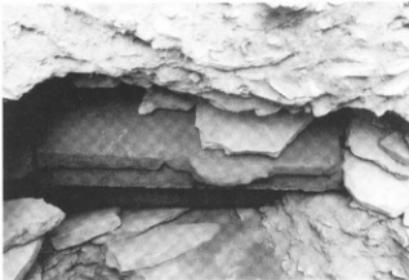
1 第5トレンチ石槨状況（東から）



2 第5トレンチ石槨下部状況（南東から）



3 第5トレンチ石棺（南東から）



4 第5トレンチ石棺（南から）



5 第5トレンチ石槨西側（南西から）



6 第5トレンチ石槨西側土層①（南から）



1 第5トレンチ石櫓西側土層②（南から）



2 第9トレンチ小段遺構（南から）

3 第9トレンチ（西から）



4 第10トレンチ全景（北から）



1 第10トレンチ1・2段目葺石（西から）



2 第10トレンチ1段目葺石（東から）



3 第10トレンチ2段目葺石（東から）



4 第10トレンチ3段目葺石（北東から）



5 第10トレンチくびれ部第1・2段目葺石（北から）



6 第10トレンチくびれ部1段目葺石（北から）



7 第10トレンチくびれ部2段目葺石（北から）



1 第10トレンチ遺物出土状況①（北から）



2 第10トレンチ遺物出土状況②（北から）



3 第11トレンチ全景①（南から）



4 第11トレンチ2・3段目葺石（西から）



5 第11トレンチ1・2段目葺石（西から）



1 第 11 トレンチ全景②（南西から）



2 第 11 トレンチくびれ部 1 段目葺石（南西から）



3 第 11 トレンチくびれ部 2 段目葺石（南西から）



4 第 11 トレンチくびれ部 3 段目葺石（南西から）



5 第 11 トレンチ 2・3 段目葺石（南東から）



1 土壠断ち割り状況（西から）



2 土壠断ち割り状況（東から）



3 石列完掘状況（北から）



4 石列完掘状況（南から）



5 土壠断面（東から）



6 土壠断面拡大（東から）



1 平成 10 年度石列西側遺物出土状況



2 平成 11 年度第 1 トレンチ遺物出土状況

3 平成 11 年度石列完掘状況（北から）



4 平成 11 年度石列完掘状況（南から）

5 平成 11 年度石列完掘状況（西から）



1 平成 11 年度石列完掘状況（南から）



2 平成 11 年度石列完掘状況（北から）



3 石列断ち割り状況（南から）



4 石列断ち割り状況（西から）



5 石列断ち割り状況（東から）



6 石列断ち割り状況（南から）



1 平成 11 年度第 2 トレンチ完掘状況（北から）



2 同（東から）



3 同（西から）



4 トレンチ内遺物出土状況



5 トレンチ内遺物出土状況



1 硙石建物跡分布調査時確認状況（東から）



2 础石建物跡トレンチ掘削状況（東から）



1 磁石建物跡基壇内集石状況（東から）



2 基壇内西側土層（南から）



3 基壇内中央部土層（南から）



4 基壇内西部土層（西から）



5 基壇中央部土層（西から）



1 基礎石下部状況①



2 基礎石下部状況②



3 基壇内遺物出土状況①



4 基壇内遺物出土状況②



5 基壇内遺物出土状況③



6 基壇内遺物出土状況④



7 基壇内遺物出土状況⑤



8 基壇内遺物出土状況⑥



1 集石遺構確認状況（北から）



2 集石遺構確認状況（北から）拡大



3 集石遺構確認状況（南から）



4 集石遺構確認状況（南から）拡大



5 散乱した集石除去後（北から）



6 散乱した集石除去後（東から）



7 集石遺構半裁状況（東から）



8 集石遺構半裁状況（東から）拡大



1 集石遺構内土壤検出状況（東から）



2 集石遺構内土坑完掘状況（北から）



3 集石内遺物出土状況①（灰釉陶器皿）



4 集石内遺物出土状況②（土師器杯）



5 集石内遺物出土状況③（平瓦）



6 集石内遺物出土状況④（土師器羽釜）



7 集石内遺物出土状況⑤（土師器杯）



8 集石内遺物出土状況⑥（土師器羽釜）